
月の記憶 後篇

kaguya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の記憶 後篇

【Nコード】

N9664Y

【作者名】

kaguya

【あらすじ】

「月の記憶 前篇」が事件編で、後篇であるこちらは解決編ということになります。

前篇はまだ完結していませんが、こっちもちよくちよく更新していきます！

竹取の氏族01（前書き）

さかやき
月代の一族編はモロに竹取物語が舞台になっています。
原文のイメージは崩壊しています。ご注意ください。

この物語は竹取物語の固有名詞等をお借りしています。
当然フィクションです。登場する個人、団体…以下省略。

竹取の氏族 01

昔々或る処に、お爺さんとお婆さんがそこそ仲良く暮らしていました。

まあ、お爺さんつてのは俺のことなだけだな。

そうそう、お爺さんお婆さんといつても年寄りを想像しないでくれよ？ 名目上の話だよ。

これラブコメだからさ、ラブ & amp・コメディーだよ？ コメディーって喜劇、笑劇のことでしょ。まさかヨボヨボの爺さんが体張って笑劇とか……死ぬつての。

それに年寄り同士のラブ展開とか重要ないつしょ。

だから名前が“お爺さん”と“お婆さん”の、その二人のラブコメってことで一つよろしく頼むぜ。

俺と婆さんは一応結婚していることになっているのだが、如何せん綺麗でも可愛くもない婆さんだ。子供なんて出来やしない。そろそろ俺の仕事を継いでくれる跡取りが欲しいのだが――。

黒髪ロングでおっとりしていてふくよかな女性――早い話、ぼっちゃりで髪が長くてほんわかした雰囲気の子――が美しいとされるこの時代、俺の嫁こと婆さんはガリガリに痩せていて超クール、冷めきっている。しかもショートカットなんだ……困った話だぜ。

婆さん、艶々の黒髪なただけどなあ……。あと一年間だけ髪切るの我慢してくれないかなあ……。

ここでちょっとだけ閑話を。

俺と婆さんが住むのは少し強い風が吹けば飛んでいきそうなボロ家で、しかも田舎過ぎて買物とか超不便。一家の大黒柱としては

貴族さんが暮らす都の方に新しい家を建てたいと思っている、思っているだけ。

かく言う俺、仕事は何をしているのかと言いますと、山に――芝刈りじゃないよ？ 山に登って竹切って、それをいろんなものに加工して売るっていう……まあ、物作り屋さんだ。

この仕事は死んだ父さんから受け継いだもので、俺の父さんも、父さんの父さんから受け継いでいる。先祖代々続く竹取の、現在その氏族の長である俺としては、息子が欲しいと切に思う。

でだ、少し前に婆さんに頼んだんだ。

「俺たち結婚して長いわけだしさ、そろそろ……」

いざ口にして言うのは恥ずかしく、顔を真っ赤にして俺がそう言くと、貴族さんたちのような煌びやかではなく、その辺に転がっていた布を縫い合わせただけのような着物を着る婆さんは――。

「ふんっ」

と鼻で笑い、

「やだやだ、これだから男は…… 本当に汚らわしい生き物だわ」
細い脚で俺を追い払う。

「厭らしいことばかり考えていないでもう少し働いたらどうなの？
今月の食費が尽きそうよ？」

嫌な言い方して悪いけどさ、この時代はまだ男性優位なの！ わかる！？

――が、婆さんに頭の上がないヘタレの俺は、
「うん…… 竹、刈ってくるよ……」

「はい、いつてらっしゃい。暗くなる前には帰るのよ」

「うん……」

正直、ヘタレな自分が嫌いになるよ。

まあ、なんだ。このように可愛げの欠片もない婆さんだが、飯食

う時と寝る時は一緒じゃなきゃ嫌だと言い張る。そこがちょっとだけ可愛かったり……。

飯にもずつと二人で暮らしているわけだしな。好きだよ？ 婆さんのこと。

そろそろ閑話は終わりにして――。

俺と婆さんの、我ながら哀れむ貧乏生活に変化が訪れる。

その日、竹刈りにも行かず畳でゴロゴロしていた俺の腹部を、あろうことが婆さんが力いっぱい踏みつけてきた。

「ぐへえ！」

鈍痛に顔を引き攣らせていると、婆さんは着物の裾を手で押さえ、せつかく育てた野菜を食うクソ虫を見るような目で俺を見下す。ちつ……。もう少しでパンツ見えそうなのに。

「あなたねえ、昼間から家でごろごろ、ごろごろと……。ニート？ ヒッキー？ 違うでしょ、さつさと山行つてきなさいよ」

婆さんは踏みつける足に力を入れながら俺を罵倒する。

「あふう……！ ——って痛い、痛い、痛い！ あっ……！ そこはっ……」

「まさかあなた……私に踏まれて悦んでいるの？ やだ、この人真性の変態だわ」

よ、悦んでなんかないやいつ！

「マジ……痛いから……婆さん、足どけて……」

「誰が婆さんですって？」

さらに足に力が入る。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ まだまだお肌プリップリですもんねっ！ 全然お婆さんじゃないです！ はい！」

「そつよ、わかればいいの」

「ふう……」

痛みから解放されてようやく一息だ。

「なに…その満足した後で一息つくみたいなもの……少しばかり不愉快だわ」

そう言って再び腹部を足の裏でグリグリ。

*

「ちゃんと働いてくるのよ」

「ういーっす」

「……だらしない返事ね」

「行ってきます！」

「はい、いつてらっしゃい」

婆さんの虐めから解放されたのが夕方近く。もう日が暮れちまい
そうなのになに行つてこいなんて…。

素人は山なめんなよ！？ 蛇とか普通に出てくるから！ ちよつ
と気を抜いていると腕とかすぐ蚊の餌食だから！ 痒くなつてから
気付いても遅いからな！

竹取の氏族02

さて、婆さんに半ば強制的に山に入ることを強いられた俺なわけだが——山を仕事場にする俺にとって、山は友達のようなものだ。草木の香り、虫の音には安らぐし、季節ごとに様変わりする景色には毎年のように心打たれるもの。

——とはいえ、大自然たる山には神様がいらっしやる。竹を切る時はきちんと感謝の心を示さなければならん。じゃないと自然は牙をむくぞ？ 人間なんてちつぽけな存在さ。この先どんなに時代が変わろうが自然には敵わないんだ。

と、山の神様にお辞儀をする意味を込めて布で鎌^{かま}を磨く。
よし、今日も一つ頑張るか。

そう意気込み、何度か屈伸をして腰をトントン叩いていると、ふと——神様の声が聞こえたような気がしたんだ。

こちらへおいで、と。

しかしその時はおよそ無意識に歩を進めていた。
自然のバランスを崩さないよう、俺も考えて竹を刈っているつもりだ。

今日はこの辺りにするかと足を止めると、な、な、何と——。
「竹が……光ってやがる……」

不思議に思っただけで近づくと、根元が光る竹が一本、幻想的に、神々しくそこにあった。

本当に山の神様がいらっしやるのかと思った。

だが、良かれとも悪かれとも、何を思ったのか、俺はその光輝く竹を、あるうことがスッパリと切っていた。

無意識か、はたまた神様のお導きか——。

切った筒の中を覗き込んで見ると、およそ三寸ばかりなる可愛らしい女の子がちょこんと座っていた。

一寸が約3.3センチなので、三寸は約10センチってところだ。

この小さな女の子は、まあ、当然かもしれないが素っ裸で…。

これは貴族様がおわします都の方で流行っているフィギュア……じゃなくて人形とかいうものか…？

「か、可愛すぎる…」

フィギュア萌えという言葉はこの時誕生した。

嘘だ。

人形かと思っていた小さな女の子は瞑っていた目をゆっくりと開き、

「ふあ…よく寝たですう……」

欠伸あくびをしながらそう言った。

*

「婆あああああああああああああああああああああああああああああああああ
さあああああああああああああん！！！！！！！！」

猛ダツシュ。スロー再生しない限り見えなくらいの足の回転で猛ダツシュ。

すっぱんぼんの女の子を掌に乗せて家まで直帰した。

「……うるさいわね」

戸口を開くや否や、婆さんは冷たい目で俺を抑制する。

「ごめん……………って、そんなことより！見てくれよ婆さんっ！
婆さん、その呼び方を好まない俺の嫁はギロリとさらに睨んでくる。が、今はもうどうでもいい。後で怒られようが踏まれようが、

あるいは晩飯抜きにされようが今は知ったことじゃない。

そして、俺の掌で可愛らしく座っている女の子の存在に婆さんが
気付き――。

「あなた………… オタクだったの？」

「違うよ！ フィギュアじゃなくて、山で女の子を発見したんだ！」
俺を見る婆さんの目は、婆さんが趣味で家庭菜園している野菜に
纏わりつく青虫を見る目と同じだった。

オタク馬鹿にすんな！？ オタクのおかげで日本の商業発展して
るんだからな！？

………… おっほん。

俺の掌で、裸姿でちょこんと正座をする女の子が動いている、つ
まり生きているということを理解すると、婆さんは居間の中央にあ
る火鉢の席から立ち上がり、これまた趣味である裁縫道具を持ち出
してくる。

「ちよつと動かないで」

ハサミを取り出すと俺の仕事着の袖を手に持ち―― パツン。

「ああああああ！！！」

俺の作業着iiiiiiiiiiii！！

―― 数十分後、俺の仕事着の袖、肘から下の部分を犠牲
に、安っぽく不格好だが三寸ばかりの女の子用の着物が出来上がつ
た。

婆さんはそれを女の子に着せ、腰まで伸びる綺麗な黒髪を指の腹
で器用に撫で、「で？」と話を元に戻す。

「私の認識が正しいのなら、人間の赤子は一尺五寸ほどだったと思
うのだけれど」

一尺は一寸の十倍、およそ33センチだ。

確かに、婆さんの言うことは正しかった。光る竹の中にいらつし
やったどこか神々しいこの女の子、身の丈およそ三寸、人間の赤子

の五分の一サイズである。

さらに、それに加えて第一声が“ふぁ…よく寝たですう……”だ。本当に赤子なのだろうか。

「うーん、でもさ、日本語話してるし、赤子ではないにしろやっぱ人間なんじゃないのか？」

すると婆さんは納得したかのように一度頷き女の子をボロボロの畳の上にそっと優しく座らせた。

「——で、どこの女なの？」

「だから竹の中にいたんだって」

俺を見る婆さんの目は恐ろしく冷酷。

「そんな御伽噺のようなこと、信じられるはずがないわ。ねえ、どこの女と作ったのよ」

「……What？」

「わ……私が初夜以外で………そ、そういうことをしてあげなかったから浮気したというの！？」

「ばっ…なに勘違いして………って、だから本当の話なんだってば！」

「男はいい身分よね。ふんっ、家に入れるお金が少ないと思ったらそういうことだったの」

違うよ！ ただ単に仕事が繁盛しただけだよ！

「どこで御側室なんて作ったの？ ふん、このままでは私との間に跡取りが出来ないと思ったのね、この浮気者」

「だーかーらー！ 本当に、本当の話なんだって。それに！ 俺はお前以外に好きな女なんていねーよ！」

「な…！ こんな時ばかり上手いように言って……」

俺も言っただけじゃなかったよ！ あーくそっ！

「そ、それを床入りの時に言ってくれるなら………私も…だ、抱かれて——…って、どうして変な顔をして鼻血を流しているの？」

照れながら言う、頬を染める婆さんに萌え萌えキュンで鼻血が…。

これは、貴族さんたちが住む都の方で今流行っているという、俗に言うツンデレ萌えってやつか！？

というか、床入りって…。意味わかってる？ 単刀直入に言うならセツ……うわっ、なにする、やめっ。

閑話休題。どうでもいい話は終わりってことな。

その後、婆さんの命令で俺は竹を使ってこの子の寝具、ベッドを作った。

この時代でベッドという寝具を作ったのは俺が初めてではなからうか。特許取る。

竹の中で出会ったおよそ三寸のこの女の子。その成長は凄まじいもので、三ヶ月も経つ頃にはすっかり人並みほどの身長にまで成長した。とはいえ、45寸、つまり150センチないくらいの婆さんよりは小さい。

俺がこの子の父親で、婆さんが母親——そんな感じでこの三ヶ月を生活してきた。

竹取の氏族03

成人女性ほどに成長された竹姫様。あ、名前は適当に決めた。竹の中にいたから竹姫様だ。

で、今日はその竹姫様の髪結いの儀式を行うために、俺は仕事もせず昼間から人里に向かっていた。

超貧乏な俺がなぜ、裳を着せ髪を結うほどの儀式を行おうかと思いたったのかというと、実は見つけた翌日から、いつものように山に登ると不思議なことが起こるようになったんだ。

竹姫様の世話は婆さんに任せ、俺は当然のように仕事に駆り出されるわけだが、なんと山には金の竹、銀の竹。

最初は目を疑った。この年でもう目がいかれちゃったのかと思うたくらいに。

しかしそれは杞憂で、つまり金の竹、銀の竹は確かにそこにそびえ立っていた。次の日も、そのまた次の日もだ。

もちろん取って帰ったさ。するとどうだ。あつという間に俺の家は大金持ち、婆さんはソッコーで綺麗な着物を買って、俺も新しい作業着を買うことを許してもらった。俺の立場って……。

しかしそれでも俺と婆さんと竹姫様が一生働かないでもいいくらいまだ金が余っているのだ。

俺は都に住まいを移そうと提案したが、「こっちの方が静かでないわ」と婆さんが言うもんだから仕方なく人里離れた田舎に住んでいる現状。

でもまあ、俺はなんともラッキーなやつだな。

男の子ではないが可愛い子供ができ、さらに金持ちにまでなれたのだから。

田舎の百姓ともは俺のことをラッキー爺さんとか呼んでいるらし

い。ふんつ、勝手に言ってる。事実なんだから。

「ごめんください」

町に付くと儀式を手配するために庄屋さんのお屋敷に向かう。

「いらつしやい。何用で？」

金と権力を振る舞う庄屋さんは成り金野郎のような煌びやかな衣装でご登場。

完全に田舎顔の俺を見るや、すぐに剣幕な表情になる。

「いやー、突然訪問してすみません。娘の髪結いの儀をお願いしたいのですが」

「ああ、はいはい。そういうのはちゃんと払うもん払ってもらわないと困るんだよね。田舎もんはさつさと帰んな」

あーあー、なんでこう金持ちは性格が捻くれるのかね。

チラッ。

口元を緩ませて懷に忍ばせた大判を見せる。

大判だぜ大判、家にはまだたくさんあるからな！ 大判小判がざつくざくやぞ！ ぞつくぞくするやろーって、俺も人のことを言えた口じゃねーな。

俺がただの田舎者でないことを確認すると、庄屋は大きく目と口を開いて固まった。

さっきまでの威勢はどうした？ 笑えよショウーヤ。

しばらく固まった後、初見の時とはコロツと態度を変え、

「はいはいはい！ 娘さんの髪結いね！ さつそく手配しましよー！」

ふっ、金の亡者め。

夜――。

俺は田舎の百姓友達を大勢家に呼び寄せ、竹姫様の髪結いの儀式が行われた。

庄屋は町の方で儀式を行いませんかと言ってきたが、おそらく婆

さんが嫌がると思いボロボロの我が家で行うことにした。

竹姫様に裳を着せると、それはそれは可愛らしい姿である。幼さが残る顔と痩せて小さな体に纏う少しサイズが大きな着物がまた萌える。

腰まで伸びる綺麗な黒髪を結い上げると、

「お父様…お母様…本当に、本当にありがとうございます。私のために、このような立派な儀を用意してくださって…」

目に涙を浮かべてそう言った。

「泣くな泣くな。せつかくお化粧してもらってるんだから」

「そうよ、あなたは私たちの娘ですもの。当然のことをしただけだわ」

この三ヶ月。婆さんは竹姫様が来てから、娘ができたと大喜びだ。顔にこそ表さないものの、前より少し優しくなっただし、家庭の和がより深まったことは確かだった。

短い髪の婆さんは、竹姫様の綺麗で長い髪を撫で――。

「これであなたも立派な女ね。いずれはお嫁に出て行くでしょうけれど、それまでは……いえ、あなたはずっと、私たちの家族よ」

「お母様………」

母と娘、涙の抱擁だった。

百姓の娘だった婆さんは、やはり貧乏だったために髪結いの儀式は行っていない。

女なら、成人のお祝いとして綺麗に着飾りたかったかもしれない。もしかすると竹姫様に嫉妬しているかもしれない。

でも、今は単純に“我が子”を思ってくれていることだろう。

竹姫様は本当の子供ではないけれど、親子の絆が、そこには確かにあった。

「びよー、竹取の爺しゃあーん、祝いの酒じよお。おっおお、ひつく……」

「庄屋ああああああああ！！！！　なに勝手に酔っぱらってんだよ！！！！！！」

お涙頂戴の雰囲気ぶち壊しだよ！

「おお？」

酔っぱらって目が虚ろな庄屋は、それでも俺を睨んだ。

まあ、成り金野郎……もとい一つ町を治める庄屋様だ。田舎で竹刈っているだけの俺とは身分が違うしな。タメ口言ってごめんなさい。というか！　お前は呼んでねーよ！

一升瓶を振り回す庄屋は、お猪口に酒を注いで俺に差し出してくる。お猪口からは完全にこぼれているが。

「おお竹取の爺さん、今日くらい飲もうやあ」

「つて、米作りの爺！　俺より先に酔っぱらってんじゃねー！　主役は俺だ！」

「かー！　畑作りの爺さんの飲みっぷりには惚れ惚れするぜ！」

「お、竹取の爺もいいね！　そーれイツキ！　イツキ！」

「うつぶ……はあ……つく、おろろろろろろ！！！」

「ぎゃー！　芝刈りの爺がゲロったああああああ！！！」

一帯は一気に賑わう。

俺としても、こんなに楽しい時間を過ごしたのは初めてだった。

男たちはたいして酒に強くもないにも関わらずテンションだけで飲みまくり、嫁さんたちはそれを見て笑いながらちびちび飲む。

百姓の爺共……まさかタダ酒飲みに来ただけじゃなからうな。

「今日はわしのおごりじゃああああああ！！　飲めええええええええええ！！！！」

一番元気なのは庄屋だった。

と、そうこうしているうちに……。

「ひやめえええ、目の前がぐらぐらしゆるのおおおおお。助けて婆しゃあん」

俺はべろんべろんに酔っぱらった。

歩く足は言うことを聞かないし、口もうまく回らない。床を這いずりながらどうにかこうにか婆さんのもとまで辿り着く。

「あひやひや、婆さんの脚しゅごくしゅべしゅべだよ。びやああ、やわらかあい。おっぱいぶにぶに」

自分が何をしているのか、何を話しているのか、もうなんもわからん状態だ。

でもべつにいいじゃん。つらいことは飲んで忘れようぜ！ 酔っぱらったら何やっても許されるんだぜ！？

と、本来なら婆さんから後ろ回し蹴りくらいされそうなことだが

——なんと、

「……………ひつく」

婆さんも相当酔っていた。愛娘のめでたい日にちと飲み過ぎたのだろう。

そして俺たちの愛娘、竹姫様はその様子をクスクス笑って見守っていた。

「……………膝枕しゆる」

「わあい」

酔った婆さんの膝に酔った俺は寝転がり、何をとは言わないが、くんかくんかしていると、

「私の足をお舐め！ さあ！ さあ！」

スツと立ち上がり俺の顔を踏みつける。酒が入ってさらにS気が増したんだろう。

「悦んでえ！」

もう子供には見せられない光景だよ、まったく。

「くすつ、相変わらずラブラブですね」

主役であるはずの竹姫様はお猪口一杯しか飲まずに俺たちの驚異

のラブラブっぷりを始終微笑みながら眺めていた。

翌朝、頭ガンガンしながら思った。飲みすぎには注意、と。
しかし反省しない百姓の爺共はその後二日間も俺の家に来やがって、そしてまた飲んだくれとなって帰っていくのだった。

さらに言うならば、酔いが醒めて自分がしたことの恥ずかしさに
気付いた婆さんは、その後一週間程度は顔を真っ赤にして俺と口を
聞いてくれなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9664y/>

月の記憶 後篇

2011年12月2日21時51分発行